

PHAYAO レポート 2012-05 (徳島大学生・現地レポート)

北タイ・パヤオ県から(2013.3/1~3/21)

健康教育への取り組み

徳島大学 医学部保健学科 看護学専攻1年 松田 彩

私は今回のスタディツアーではホイプム村でホームステイをするという貴重な体験をさせてもらった。ホイプム村にはモン族が住んでおり、モン族はラオス内戦でラオスからタイに移動してきた。現在もタイ政府に村として認められていないために国の支援を受けられないという問題がある。

ホイプム村は山の中腹部にあり、舗装されていない山道を車で三十分程進むとたどり着いた。ホイプム村では基本的に電気が使えない。ソーラーパネルで発電することによって夜は電気をつけることができるが、電気製品はほとんどない。水道は谷水を利用しており、毎日シャワーをあび、トイレは水を容器にためて流す。私のステイ先では冷蔵庫はなかったので、余った料理は戸棚に保管していた。一日たったら庭に残飯を捨てる。家の周りには犬や鶏が何匹もいて、たまに家の中に残飯を食べに入ってくる。庭では野菜を作っており、山の上にはトウモロコシ畑がある。料理は薪を使って火をおこし、包丁だけで野菜を切ったり皮をむいたり魚をさばいたりしていた。家の中では土足で、床から浮いているベッドの上でだけ靴を脱いでいた。食器はバケツに水をためて洗っていた。

三日間ホームステイさせてもらって、ホイプム村の人々の生活はとても効率的だと思った。このような生活では、残飯は犬が食べてくれるのでゴミを出すこともないし、水も必要最低限しか使っていない。日本のトイレは流すのに一回で水を約6リットル使っているという話を聞いたことがある。それと比べると容器に水をためて流すことでかなりの量の水が節約されていると思った。バッテリーの電気はなるべく使わないように朝は朝日と共に起きる。日本での私の生活と比べて無駄がないように感じた。だからといって生活に楽しみがないようには見えなかった。子供たちは庭で石を投げたり、おいかけっこをしたり、木に登ったりして遊んでいた。お母さんたちは子供たちを見守りながら話をしたり刺繍をしたりしていた。また笑顔でいることが多かった。そのことが生活が苦しうに見えなかった一番の理由かもしれない。しかし農業は天気にも左右されるし肉体労働なので決して楽な仕事とは言えない。それを改善するためにも商品作物を作って安定した収入を得られるようにすることが大切だと思った。

三泊させてもらったが、衛生的に問題があると思ったところはあまりなかった。ステイ先のお母さんは食事の前に子供に手を洗うように言っていた。シャワーも毎日浴び服も着替えていたので不潔だとは思わなかった。しかし、食事の前に手を洗ってはいたが石鹸を使っていなかったのが少し気になった。家の中に普通に犬が入ってくるので犬が苦手な私はあまりよい気持ちはしなかった。犬は病原菌を持ってくる場合もあるので、犬による健康被害がないのか気になった。またお菓子の袋をそこら辺の道傍に捨てているのが気になった。

ホイプム村がタイ政府に村として認められるように支援しているシャンティ山口という組織の佐伯さんに話を聞いた。健康教育としては、講師の人を招いてセミナーを行っている。今までには避妊の方法、感染症の予防、村の環境整備、妊婦と子供の生活、農薬の取り扱いと注意事項、飲み水を煮沸した方がよい理由などのセミナーを行った。そしてセミナーの最後に次にどのようなセミナーをしてほしいかアンケートをとって、次に行うセミナーを決める。子供の健康や育児に対する疑問が多いそうだ。また保健師の方に来てもらって家庭調査を行っている。全ての家庭にアンケート調査を行い、そのデータを集計して問題点を見つける活動を行っているそうだ。

シャンティ山口が行っているトイレを作る活動も衛生とはきっても切り離せないものである。昔のトイレは糞尿を底のない穴あきのタンクのようなものにためておくだけだった。発生するガスは管を通して外に出すようにしていた。しかしこのトイレでは糞尿を完全に処理することができない。雨季に大雨で増水すると糞尿が外に流れだしてしまい、増水の後その周囲で遊んでいた子供に健康被害がでるという問題があった。その問題を解決するために糞尿を完全に発酵処理し、野菜を育てる肥料も生み出すエコトイレを作る活動を行うようになった。エコトイレ作りは全てを援助するのではなく、トイレ作りに必要最低限の材料を渡して作り方だけ教えているそうだ。このようにすることで、次の世代にも知識を受け継ぐことができる。ボランティアとは未来のことも考えて支援するべきことを選ばなければならないと思った。

今回ホイプム村では全ての家のエコトイレが完成したという祭りを行った。祭りでは、たまいれをしたり、餅つきをしたりと村人全員で、エコトイレの完成を祝った。シャンティ山口の人々は村人から大量の手作りの贈り物を受け取っていた。村人はとても感謝しているように見えた。このエコトイレは修理をする必要はないと聞いた。しかしまた子供が家庭を持ったら、さらにトイレが必要になるかもしれない。子供にトイレの作り方を受け継ぐためにも、知識を伝えていくことが大切だと思った。またトイレをきれいに使うことで清潔を保たなければならないと考える。他の村の小学校で流さずに虫がたまっているトイレがあった。いくら糞尿を完全に処理することのできるトイレでも使い方を間違えていけば衛生的に問題である。先生や親は子供にトイレの使い方を教育しなければならないと思った。

江戸時代の日本ではこのエコトイレのようなものが使われていたそうだ。肥溜めで糞尿を発酵処理して、それを肥料として利用していた。エコトイレはそれを基にして作られたそうだ。昔のものでも今より優れているものもある。昔のものを見直してみることも大切だと思った。新しいものがよいものだとは限らない。

今回のスタディツアーでは日本での私の生活について改めて考えさせられた。今の私の生活は電気がなくては成り立たない。水道も電気を使っている。このような状態は問題ではないかと思った。タイに行ったことは私の考え方を変えた。このような貴重な体験をさせてくださった言葉が通じないのにもかかわらず私達を暖かく歓迎してくれたホイプム村のみなさん、ボランティア活動についてさまざまな話を聞かせてくださったシャンティ山口の方々、スタディツアーの費用を負担してくれた両親、ツアーに共に参加した先生と友達にとっても感謝しています。



ホストファミリー（Laochaiさん家族と）

日本のあるべき姿とは？

～ガラパゴス技術なんていわせない～

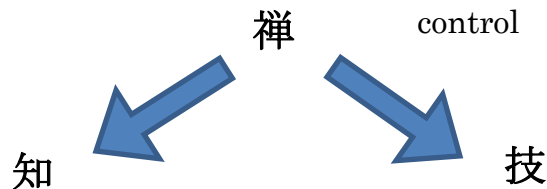
徳島大学 工学部 電気電子工学科 1年 中津留康幸

はじめに

H25.2.23 から 3.15 まで、私はタイに行き現地の有名私立校や、NGO 団体シャンティ山口のスタディツアーに参加しました。そこで、学んだことを元に日本の現状を見つめ直し、これからの日本のあるべき姿を考えていこうと思う。

ルンアルン学園を見て

ここは小中高一貫の私立校で、学力、技術、禅をモットーとして学習している。



要は、人間性をつけるために学習だけでなく、その国の伝統的な技術や文化を残していくような教育が必要だとしている。禅は、やる気などの精神的なもので、それにより勉強の効率に関係するとしている。

ふと自分の高校時代を振り返ってみると、ほとんどの人が大学に行くという進学校で毎日勉強ばかりの日々が続いていました。ルンアルンの教育方針を聞いて、バカバカしいことに時間をさいていたなあと考えた。そもそも、センター試験いや試験制でほとんどの合格者を出すのが日本の残念な点だと思った。

ホイプム村で住んでみて

シャンティ山口のスタディツアーの一環で、ホイプム村で三泊四日を過ごした。そこは、電気はなく（照明程度）上下水道もなく、もちろんガスもないようなところで暮らしていた。吉幾三でもないが、都会のほうに移り住む気もなく不自由なく暮らしていた。しかし、全く田舎というわけでもないようで、デジカメやコンポなどを持ち合わせている方もいた。しかし、それは娯楽の一部であり生活には影響を与えず、変な渡来人が来た弥生時代のような生活をしている。

たとえば、自給自足であり農業である。ただ、渡来人は経験があるならいろいろ教えてあげるべきだ。しかも、それは技術であるのがよい。渡来人は、老子の教え「魚より魚の取り方を教えなさい」に則ってきてくれたはずだ。

特にトイレ、これは衛生管理の面に繋がるのだが、これが考えるべき所が多い。村で唯一の下水処理施設だ。これが設置されるまでは、ずいぶん衛生状態が悪かったらしい。

以上より日本に何が見えてくるか？

ここからは、私個人の意見になるのだが世界に対して日本が与える影響は大きいと思う。というのも、それなりに文明を持って進化してきたと思う。今回のトイレは、日本にかつてあった肥溜の技術を応用してできた物らしい。また、古くからある井戸掘りの技術など開発途上の国に対して日本が世界に対して担う役割が大きいと思う。それと同時にそのものの必要性を訴える説得力がついていなければならない。そういったことも含めて学ぶべきところは、学校ではないか？

学校で学ぶ数学や物理などももちろん必要だが、それを知っていて誰も幸せにできないし、ビジネスにも直接的に使うことができない。であるならば、できれば技術。難しければ、その技術の必要性を紹介する授業が必要だと思う。特に地域単位の授業で紹介して、感動した学生がそういった技術を習得できる企業につけば、技術をもった方がたくさんできるはずだ。それで、大学の入学者が減ってもいいとおもう。

そのような人が多くいるならば、日本でも変化が起きると思う。なぜ、かつて日本になかった上下水道が今はあるのか？ あまりにも物に頼り過ぎでないか？ など。そういった一人ひとりの意識改革こそが持続可能な社会につながっていくと思います。

おわりに

私は、初めての海外旅行が、後進国でよかったと思います。というのも、日本の便利さが身に染みた。まず、バスの路線図がない。それが、車社会をつくっていると思います。しかも税金が安すぎる。かといって日本も他人事でもないような気がします。もう少しガソリンを貴重につかうなり、公共交通機関をつかうなりしてほしいですね。

温水便座もすごいと思った。タイですこしお腹がゆるくなったとき、あったらいいなと本当に感じた。

こういった点で日本には捨てがたい技術がたくさんあるなあと感じた。それを国内だけでなく世界に売りだせたら日本は強くなる。というのがタイで感じました。



餅つき大会に挑戦

遺伝子組み換えトウモロコシが人体に与える影響について

徳島大学 医学部保健学科 看護学専攻1年 原田真理子

『ホイプム村で学んだこと』 私は、タイでNPO団体シャンティ山口の活動について学ばせていただきました。シャンティ山口の活動内容は人々に「自立のための知識を持ってもらう」ことだと私は感じました。今回私がタイの少数民族「モン族」が生活されている「ホイプム村」で3泊4日のホームステイを体験させていただきました。

その中で私は「モン族」の文化や現在の生活環境、経済状態、生計の立て方について知る機会を得ました。日本人の中でモン族について知っている方はまだまだ少ないとは思いますが、意外なことにモン族と日本人はルーツが同じなのです。互いにモンゴル民族を祖先とし、容姿や餅つきの文化等多くの共通点があるのです。

生活環境について、ホイプム村では大家族で生活しており、鶏や豚が放し飼いされていました。ガスや電気は通っていませんでした。しかし金銭的なゆとりがある家庭では自家発電？燃料電池？を使い照明をつけ、テレビを見たりしていました。生計は農業によって成り立っており高収入はあまり期待できませんでした。そんな状況下で約6年前アメリカ企業が遺伝子組み換えトウモロコシを売り込み、これまでの作物より収入が増えることから山を切り開いて作った土地は一面の遺伝子トウモロコシ畑となりました。しかししばらくすると遺伝子組み換えトウモロコシが土壌や人体に悪影響を与える可能性が指摘されるようになりました。

『遺伝子組み換えトウモロコシの特徴』 遺伝子組み換えトウモロコシには一体どのような特徴があるのでしょうか。前提として遺伝子組み換えトウモロコシは一般に日本で口にするトウモロコシとは大きな違いがあります。遺伝子組み換えトウモロコシの用途、外見、遺伝子組み換えたによって得たものという3つの事柄を採り上げましょう。1つ目用途について、遺伝子組み換えトウモロコシは自動車などの燃料となるバイオエタノール燃料の原料として国際的な需要が見込まれています。また豚や鳥などの家畜飼料として用いられる場面を目にしました。2つ目に外見についてです。私は村で農作業をお手伝いさせていただき初めて遺伝子組み換えトウモロコシを目にすることができました。実ははちきれんばかりに大きく硬く乾燥おり、人間が食べるのは向かないという佐伯さんのお言葉通りだという印象を受けました。3つ目にこの品種には栽培しやすいように遺伝子を変化させ主に2つの性質が付加されていました。1つ目は害虫抵抗性であり、特定の害虫への殺虫作用を有しています。2つ目は除草剤耐性です。除草剤は強力であればあるほど栽培に雑草を簡単に一掃するでき、手間が省けます。

しかしそれほど強い薬剤を使用すると、雑草だけでなく農作物まで枯れさせてしまいます。そのためこの品種は該当する薬剤への耐性をもたせ雑草が枯れても農作物は成長するよう遺伝子を変化させたのです。

『遺伝子組み換えトウモロコシが与える人体への悪影響』 私は、ツアーに参加する前、「遺伝子組み換え」トウモロコシによって既に土壌や人体への悪影響が明確に現れているのだろう。だからシャンティ山口は栽培をやめてマンゴーやコーヒーのような換金作物に移行したほうが良いと考えていらっしやるのだと私は考えていました。

しかし現地に行って話を伺い、実際に見させていただくと私の予想は間違いだと分かりました。現地では私がはっきり確認できた人体への悪影響は強力な「除草剤」によるものでした。除草剤とは当然雑草を無くすために使用される薬剤です。そのため当然人体にとって100%無害ということはありません。しかし当初現地の方々には除草剤が身体に悪いと知らされていなかったため、散布の際に口や鼻を布で覆ったりせず作業を行い体内に殺虫剤を吸い込んでしまいました。その結果喘息を患ったり、関節の痛みを訴える方が増えました。「遺伝子を組み換え」と、人体にどのような影響がもたらされる

のか知ることがツアーの目的の一つでした。しかし私が確認できたのは「除草剤が人体に悪影響をもたらす」という局所的なことでした。

『遺伝子組み換え作物は人間にとって安全か危険か』 「遺伝子が組み換えられた作物が安全か危険か」という全体的なことについて私は把握できませんでした。調べてみると日本では厚生省が安全とし日本のスナック会社でも使用されています。一方でEUなどでは安全性が疑われており、表示が義務付けられており食べるかどうかは個人の裁量にゆだねられています。

ラットなどを用いた実験では生体に異常が生じ、危険性が高いと言われています。このように遺伝子組み換え作物については賛否両論あり、安全だ！危険だ！と決めるのは難しく思いました。私にとって「遺伝子組み換え作物が危険だと明確には分かりにくい。だからこそ前もって危険を想定して対策を練ることが大切だ」佐伯さんや安藤さんのお話が印象的でした。

『最後に』 シャンティ山口、ホイプム村の方々そしてシャンティ寮の皆さん本当にお世話になりました。わずかな時間でしたが、皆さんに出会えて私の世界はぐっと広がりました。私には国籍があるのが当たり前で、ライフラインが整備されているのが当たり前、学校に行くのが当たり前で、職業は選べるのが当たり前でした。しかし現地では私が当たり前だと思っていたことの多くが当たり前ではなく、関係ないと思っていたタイの人々の生活が日本人の生活によって圧迫されていると実感することができました。

また、シャンティ寮生では家事に畑仕事、勉強と本当に忙しく生活されている学生が学年でトップの成績をとっておられると伺い、私は本当に感激しました。彼らの自立した生活や勤勉さなどから自分がいかに未熟なのかを教えていただきました。

シャンティ山口の活動に参加させていただき「自立のために共に努力する」ことが本当の支援なのだとわかりました。ツアーを通し出会った皆さんが健康で明るい人生を歩まれることを願わずにはられません。本当にありがとうございました。



水運び競争（以前は、このような竹の筒に水を入れて運んでいたそうです。）

シャンティ山口の活動に参加して

～遺伝子組み換えトウモロコシは安全か？～

徳島大学 医学部栄養学科 1年 酒井晶子

遺伝子組み換えという言葉は誰もが一度は聞いたことがあるのではないだろうか。スーパーのポテトチップスの袋の裏にも私達は見る事が出来る。しかし、この言葉を聞いてどれだけの人がプラスのイメージを持つのであろうか。

遺伝子組み換え作物とは遺伝子組み換え技術を用いて遺伝的性質を改変し品種改良が行われた作物のことを指す。これらの問題点は生態系への影響、食品としての安全性が不明確なままであり、さらには組換え品種を開発した企業が種子の支配を通じて食糧生産をコントロールすることにつながる恐れがある。

しかし一番恐ろしいのはこのような危険性を知りながら、今もなお遺伝子組み換え作物が作られ続けていることであった。

海外ボランティア。若い人なら一度は海外に出て、日本とは違う環境で恵まれていない人に支援をしたい。という人は少なからずいるだろう。有名な団体も数多く存在し、JICA や国境なき医師団などにあこがれる人も多いのではないだろうか。

そんな中、タイの山奥で少数民族の支援をしている NGO 法人シャンティ山口今取り組んでいる活動こそ、遺伝子組み換え作物の問題から生じるものであった。

東南アジアにあるタイ王国は日本人にも観光地としてなじみある国だ。首都バンコクやプーケット。アユタヤ遺跡や水上マーケット等、有名な観光どころも数多く存在する。そんなタイをバンコクからバスでおよそ 10 時間ほどだろうか、北へ進むとシャンティ山口の活動拠点であるパヤオ県に到着する。タイには様々な民族が住んでおり、民族により衣装も言葉も少しずつ異なる。パヤオ県には民族のなかでも少数民族にあたるモン族が住んでおり、支援はそこで行われている。シャンティ山口は山口県から発足した団体で、前身は、JSRC(日本曹洞宗アジア難民救済会議) というものであった。

タイに住むモン族はラオス内戦の勃発により隣国のタイへ移ってきた人々が大半を占め、開拓もされていない山奥で、自然状況の厳しい中彼らは過ごしてきた。難民としてタイへやってきて、十分な設備のないまま住み着いたため、衛生状況からくる感染症や貧困に苦しんできた。

シャンティ山口はそのような状況を目の当たりにし、衛生の根本でもあるトイレ環境を改善し、貧困のため学校にいけない子供のために学生寮を立ち上げた。そんな中、目の前に遺伝子組み換えトウモロコシが立ちはだかった。

モン族は長い間貧困で苦しんできたため、そのつらさは身に染みて味わってきた。病気になっても治療を受けられない。子供を学校に行かせられない。また難民のため国籍も得られず、山の中から抜け出せない。豪雨が村を襲っても必死で耐えるしかなかった。

そんな日々を送っていたある日、有名な農薬会社が救いの手を差し伸べた。その農薬会社は、村人に魔法の種を渡した。その種は一見普通のトウモロコシの種にしかみえなかった。しかし、それは森林を切り開いた斜面でも植えることができ、森林の腐葉土によってとてもよく育った。

また、除草剤をまいても枯れないため、雑草だけを簡単に枯らすことが出来た。さらに収穫したトウモロコシは、バイオエタノールやらコーンシロップやら肥料やらに使うため先進国の人が高値で購入していった。そして手元には今までとは異なる高額なお金だけが残った。人々は喜んだ。バイクは買えるし、テレビも買える。子供に学校へ行かすことも出来る。こうしてトウモロコシ農家は増えていった。

しかし数年後様々な問題が出てきた。まず、土地がやせてきた。同じ土地にトウモロコシの種をまいても育ちは悪く、土地を新たに開拓しなければならなかった。次に森林を伐採することにより、今まで雨水の調節をしていた木が消えた。そのため洪水が増え、腐葉土が流され、良質な土地がさらに激減した。そして人々はトウモロコシが不作の年でも、来年のために農薬会社から毎年肥料や農薬を購入しなければならないため、借金も出てきてしまった。さらには頭痛、喘息や関節痛などの健康被害も出るようになった。

そう、あの種こそ遺伝子組み換えトウモロコシの種であった。

農薬会社は自分の会社に来るだけ利益が入るように、トウモロコシに除草剤耐性遺伝子を組み込み、一世代で枯れるよう改良した。毎年、農家の人が農薬と種を買ってくれるように。さらには農薬を大量に使用するが、農薬の人体への影響を知らない村人はマスクや保護服を着ないため、健康被害が出てしまった。また、組み換え遺伝子トウモロコシ自体は危険性が高いと言われているだけで、明確にどのように危険かは断言出来ないでいる。

そのため規制がしにくく、簡単に海外の会社がタイで組み換えトウモロコシを売ることが出来る。

こうして負のサイクルがはじまった。トウモロコシを植える。同じ土地だと育たないので新たに土地を開拓する。農薬を使って雑草を抜き、収穫時には枯れたトウモロコシから実だけを収穫する。そして来年のための高価な種と農薬と肥料を農薬会社から購入する。しかし、土地は限りがあり、ある程度まで行くと同じ土地で育てるしか方法が無くなっていく。すると収穫量が減る。そして借金だけが増える。しかし村人はやめようとしなない。いや、できないのだ。残された借金を返済し、今までの生活を維持できる収入源が見つからないためだ。

私は4日ほどホイポム村のモン族のもとでホームステイをさせていただくことが出来た。笑顔で迎えてくれた家族はもちろんトウモロコシ農家だ。言葉は通じなかったけれどもご飯や水浴び、家事の手伝いなどさせてくれた。「汚れている部分は手首の内側でこすっておとすのよ。」ジュスチャーでお母さんが教えてくれた。日本でもたまに思い出してやってみたりする。小さい坊やは水遊びが大好き。いつも泥んこで私まで泥んこになってお母さんを困らせてしまった。お父さんもジュースを買ってきてくれてみんなと一緒に飲んだ。本当においしかった。

別れの朝、私は泣いた。家族と離れるのがさみしいという気持ちもあったが、それ以前にくやしきから出てきた涙があった。笑顔の奥に見えた農薬の空き瓶。長男がおもちゃ代わりに遊んでいたトウモロコシの残りくず。楽しそうに家族みんなでトウモロコシ畑に行く姿。

私は知っている。どれだけ遺伝子組み換えトウモロコシが自然にも体にも悪影響か。でもそんなこと到底言えなかった。トウモロコシから出来たお金でこの生活が維持できている。維持できているからこそ家族の笑顔が守られているのだ。

そんな私に佐伯さんは「一番大切なのは絆づくりなんだ。」そう声をかけてくれた。外部の人間がいきなりきて、村人の生活スタイルを批判しても当然受け入れてくれるはずがない。例えどんなに悪影響な生活スタイルだとしてもだ。絆、つまり信頼を村人から得ることで初めて意見を聞いてもらえる。そしてその意見を村人が納得してもらうことにより、村人自身が自らの生活スタイルを見直し、考える。重要なのは村人が自立すること。

現地責任者の佐伯さんは、組み換えトウモロコシの代わりになる作物を植える「アグロフォレストリー・プロジェクト」を進めている。現地に設置した農業センターで現地に合った換金作物を研究し、組み換えトウモロコシの単一農業から、複合農業に変えようというものだ。トウモロコシに匹敵する換金作物のマンゴー、コーヒー等を農業センターで試してみる。うまく育つと立証されたら、実際に村人にも植えてもらう。まだまだ試作段階だが踏み出した一步は大きい。さらにここでは村人たちが農業について学ぶことも出来る。だからこそ、自分の好きな換金作物を自宅で試すことが出来る。決して強制ではない。しかし学びに来る村人は多いという。

ホームステイの最終日、トイレの完成を祝う会が村で行われた。シャンティ山口のスタッフが作った、循環式トイレは村人の衛生環境を整えるのに大いに役立った。広場では村人ほぼ全員が集まった。言葉は通じないけれども、皆笑顔で私たちに踊りや手料理をふるまってくれた。皆本当に嬉しそうで、私はそこにはっきりと村人とシャンティ山口の「絆」を垣間見ることが出来た。

改善策を見つけたり、補助金やボランティア等「支援」をする団体は数多く存在する。だが、実際に現地の暮らしを知り、身をもって味わい、村人の「自立」を目指す団体はどのくらいあるのだろうか。

シャンティ山口の活動の根本である「絆」づくり。それは決して「支援」ではなく「共存」して初めて生まれるものである。支援される側とする側。その差は与えられた環境にあり、その人自身に差はない。支援される側も我々と対等な人間だ。現地の人を尊重し、共に生きる。

そんなシャンティ山口の活動は私のボランティアという概念をがらりと変えた。

他の団体に比べれば規模も小さいうえに、資金も足りていない。そんな中でコツコツと活動を続けても無意味と思う人がいるかもしれない。そんな人は大海原の一滴を掬ったときどう考えるのだろうか。きっとたかが一滴と考えるだろう。しかし佐伯さんは違っていた。されど一滴。この一滴が大海原を作っている。今回も私を含めその一滴の影響を受けたものは多い。日本に帰った今、私が出来ること、それは懸命に生きること。生きて今何が身の回りで起こり、自分が何をすべきか考えること。その積み重ねが、一滴の一部となる。与えられた環境は誰もが完璧なものではない。その中でどのように生きていくか。私たちは考えるべきではないだろうか。

最後になりますが今回お世話になった佐伯さんをはじめ、シャンティ山口のスタッフの方、そしてホイポム村の方々、シャンティ寮の皆さんに厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



ホストファミリーと一緒に食事の準備

遺伝子組み換えトウモロコシ栽培について学んで

徳島大学 医学部 栄養学科 1年 皆川 祐希

バンコクから夜行バス・車を乗りつぎ何個もの山を越え、ラオスの国境近くまで行ったところにホイプム村という小さな村がある。ホイプム村にはモン族という少数民族が住んでいる。モン族はベトナム戦争時にラオスから逃れ、タイの山奥に移住してきた民族である。村はモン族がラオスから移住し出来た村なので、行政には村として認められていない。

そのため、国籍を持たない人も多く、行政の支援も十分に受けていない。また大都市への出稼ぎや農業で生計を立てており、タイの地方公務員(大学卒業初任給)が年間12万バーツなのに対し村人は3万5千バーツと生活水準も低い。たしかに村に足を踏み入れると、ホームステイ先にはガスや水道、電気が通っておらず、調理も火で行い、洗濯物も手で洗っていた。

最初私が訪れた時、日本とは違う生活様式に驚き、戸惑った。だが、3日間のホームステイでもものすごく不便だった・大変だったと感じることはなかった。朝早くに起き、家畜に餌をやり、農作業を手伝い、お昼は村の人と集まってお話しなどしてのんびりし、夜は明かりがないため日が沈めば寝るというのんびりした時間が村には流れていた。そのため私のホームステイ先には時計が無かったが、特に必要と感じることはなく、時計を常に見ている日本の生活を忘れることができた。

こんな日本から遠く離れた村で村人の自立に向けた支援活動を行っている人がいる。それがNPO法人シャンティ山口の佐伯さんである。今回はシャンティ山口の活動を見学するため、シャンティ山口の事務所やホイプム村に訪問させてもらったのだ。

私はここでシャンティ山口の活動を通してたくさんのことを学んだ。シャンティ山口が行っている村の自立支援活動は多岐にわたり、エコトイレの普及、自然エネルギー活用のための研究、保健師による公衆衛生向上・栄養改善のための講習会の実施、保育園の建設、シャンティ寮の運営、村の農業方式の転換など、村の生活の質の向上・持続可能な社会に向けたことならなんでも行っていた。

それらの活動すべてにあてはまることだが、シャンティ山口の活動は物的な支援、押し付けの支援ではない。これはシャンティ山口が共に学ぶこと、人とのつながりを大切にしているからだ。たとえば村で農業方式の転換を行う際、普通は村に農業の専門家を呼んでアドバイスを受けそれに従って農業を行うのが一番早く答えを見つけられると考えられるだろう。

しかしシャンティ山口の佐伯さんは土や気候や土地については専門家よりも村の方がよく理解していると考え、農業試験場を作り、村人と共に試験栽培・研究を行っている。

このようにシャンティ山口の活動は、問題を村の人と一緒に考え、研究から学び、問題解決を行っている。このような共に考えるという姿勢は学ぶ楽しさを生み自立を促す。また、学びたい、知りたいという人が集まると、人との出会い・つながりも生まれる。人とのつながりができれば、人が他人のことを自分のことのように感じるができる平和な社会を作れるのではないか。このように共に学ぶことを楽しみ、学びから人となつなるといのが本当の支援活動やボランティアの在り方なのではないかと佐伯さんを見ていて感じた。

そのような理念に基づいて行っているたくさんの支援の中で今回、私はホイプム村の農業方式の転換をはかる活動について述べようと思う。

ホイプム村は昔から農業で生計をたてていたのだが、子供の人口の増加により現金収入が必要となっていた。そんな苦しい状況の中、約6年前に現れたのがアメリカの農業大企業A社の組み換えトウモロコシである。これは、A社の遺伝子組み換えトウモロコシの苗と農薬をセットで買い、その収穫分をA社がすべて買い取ってくれるというシステムになっている。そのシステムを利用し、村の人たちは大きな実のついた遺伝子組み換えトウモロコシを収穫し確実に現金収入を手に入れることができるようになった。

た。そこで今まで行ってきた自給農法をやめ、組み換えトウモロコシだけを育てる単一農業をし始めた。だか、実はここに大きな落とし穴があったのだ。

A社の遺伝子組み換えトウモロコシには除草剤への耐性を持っており、除草剤を噴霧した際、雑草を枯らし、土からの栄養をトウモロコシだけに送ることで大きなトウモロコシを栽培することができるようになっている。一見良い特徴のように見えるが、これは初めの収穫のときだけで、何回もその土地でトウモロコシ栽培を行っていく内に土地の栄養がなくなり土地が使いえなくなってしまう。そこで村人たちは焼畑を行い、新たな農地を開拓していく。これを繰り返していくと森林伐採によるCO₂の増加や地盤の緩みにつながってしまうのだ。他にも、A社の遺伝子組み換えトウモロコシは種を作らないことから、毎回A社から種を買う必要があるということも問題である。種が出来るのであれば、A社から毎年苗と農薬と除草剤を購入する必要がなくなってしまう。それではA社としては大変困る。A社の遺伝子組み換えトウモロコシの苗と農薬をセットで買わせて、トウモロコシを育て、その収穫分をA社がすべて買い取り、また苗と農薬を買わずというサイクルを行い、A社は儲けているのだ。これはホイブム村をビジネスの対象としか見ていない。また毎年A社にお世話になっているということは、村の自立を阻害しているとも考えられるだろう。

このように遺伝子組み換えトウモロコシの単一栽培は環境問題だけでなく村の自立支援の阻害、農薬による身体被害などさまざまな影響を及ぼしているのだ。

この状況を改善するためにシャンティ山口ではアグリフォレストリーと呼ばれる活動を行っている。アグリフォレストリーとはトウモロコシを植えている土地にコーヒーやゴム、マンゴー、アボガド、マガダミアナッツなどの換金作物を植え、農業形式を徐々に転換させていき、山に緑をもどす活動のことである。農場試験場を作り村人たちと試行錯誤を続けながら現在もアグリフォレストリーの活動に取り組んでいる。

このようなタイの農業の現状やシャンティ山口のとりくみを、私は実際に訪れ肌で感じてきた。今まで遺伝子組み換えトウモロコシの危険性や問題点はもちろん遺伝子組み換え食品についてあまり知らなかったし関係ないことと置いていたが、実際に行って見ることによってより身近に感じる事ができた。

このスタディツアーでも、シャンティ山口の理念にあるように学びによって人が集まり、人とのつながりが生まれ、他人のことを自分のことのように思えることができるようになったのではないかと。遠い日本から直接的な支援や手助けをすることは難しいかもしれないが、せめてこのスタディツアーで学ばせていただいたことを人に伝えていけたらと思う。



▲農業試験場で換金作物を試験的に栽培している



▲ホイブム村の様子



♪ どれえ～もん ♪ ♪



ホイプム村の皆さん ～お世話になりました～ “笑顔をありがとう”